

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (251)

荊妻・細君

子どもたちが寝静まったあと、タモツ君のお母さんがお父さんと話しています。

「ケイサイ？」

「そう。クサカンムリに刑罰の刑の荊。中国の後漢の梁鴻りょうこうの妻の孟光もうこうが貧しいときにイバラのかんざしを挿し、木綿もめんの裳裾もすそを身につけたということから、自分の妻のことをへりくだって荊妻というんだって。」

「そうなんだ。学生つぼうちしょうようのとき、坪内逍遙つぼうちしょうように『細君』という孤児そのお園の悲劇の小説があって、「細君」というのは、自分の妻のことを謙遜けんそんしているのだって、教わったことがあったわ。」

「そう、奥方とか奥様とかとちがって、細君なんだね。「細」は「小」と同じなんだ。」

「その「細」が「妻」で、それに敬称の「君」がついた「妻君」だと勘違いして、ほかの人の妻のことを「細君」というようにもなったんだって……。」

元々、「細君」は自分の妻のことを言うことばだったんだ



【編集部注】『細君』は、明治 22(1889)年 1 月に「国民の友」に発表されました。夏目漱石の『心』(大正 3(1914)年 4 月 20 日初出の題字による)では、「私」に対する会話で「先生」が「奥さん」を「妻さい」と呼び、ときに「妻君」と言っています。